[研究資料]

大相撲における女人禁制の研究（V）

――大相撲観戦者の年代別の傾向から――

山本恵弥里*1・生沼芳弘*2・了海　諭*3

A Survey of Nix Women in the Sumo Ring（V）

――The Case of the Sumo Spectators' Voices among the Generation Gap――

by

Emiri YAMAMOTO, Yoshihiro OINUMA and Satoru RYOKAI

Abstract

The purpose of survey is to see opinions of the "Nix Women" and the traditional Sumo patterns from viewpoint of the spectators. In this survey, we carried out questionnaires for the spectators who saw the Sumo at four times: March, May, Jury, and November in 2004.

From this research, it found that most of the spectators are over 50 years of age. They who were under 30 years of age were in the majority of the Sumo in 1957. Even now they have watched the Sumo. Therefore, they seem to constitute the major spectators.

And, the sumo spectators in the various generations don't differ in degree but not in kind. The teenagers agree to send the honorable recognition of champion from the women in the tournament or to play Sumo with girls on the Sumo Ring. That is, there are not the differences of the opinion about the Nix women and the tradition of sumo.

I　はじめに

近年，大相撲における満員御礼は初日・中日・千秋楽に集中し，その他の日に出ることはほとんどない。満員御礼は，観客が会場をどれだけ埋めたかではなく，その日の切符の売れ行きをもとにして判断をしているため，2003年までは切符が完売した時に満員御礼を出していた。平成元年（1989）11月場所11日目から平成9年（1997）5月場所初日まで，46場所連続で出たこともあった。しかし，観客数の減少にともない，現在では切符が9割方売れた時に満員御礼を出すように変更された。平成18年（2006）の1月に行われた大相撲東京場所での満員御礼が出た回数は6回であった。

大相撲の観客数の減少とともに，女人禁制は近年最も大きな問題として取り上げられている。大

＊1　東海大学体育学部非常勤助手　＊2　東海大学体育学部体育学科　＊3　東海大学体育学部非常勤講師

相撲の女人禁制とは，現在では本場所の土俵に女性が入ることは禁じられ，土俵に上がれないことを指している。江戸中期から明治５年（1872）までは観戦も禁じられていた。性別に関係なく観戦できるようになって130年ほどが経つが，女人禁制に関する観戦者の意識は調査されてこなかった。そこで本研究は，大相撲における女人禁制と伝統に関する観戦者の意識について年代別の傾向を明らかにすることを目的とした。本研究での伝統とは，「ある集団が歴史的に形成し，その構成員によって共有されている思考様式・行動様式の総体」[1]である。また，本研究は大相撲における女人禁制の研究Ⅰ[2]，Ⅱ[3]，Ⅲ[4]，Ⅳ[5]に続く，継続的なものである。本調査は，財団法人日本相撲協会の許可を得て行ったものである。

Ⅱ　大相撲の観戦に関する先行研究

大相撲観戦の先行研究としては，和歌森太郎氏が相撲協会とともに観客の生態の把握を目的として，昭和32年（1957）夏場所の初日，３日目，４日目と質問紙調査を行っている[6]。三日間を通して観客全員に調査用紙を配り，花道の出入り口など13ヵ所に設けた投票箱にて回収を行い，三日間で1720部を回収した。調査項目は全部で20項目あり，項目の概要は表１に示した。また，調査対象者の年齢構成や女性の割合については図１および図２の通りである。

Ⅲ　調査方法

本調査では，平成16年（2004）３月大阪場所，５月東京場所，７月名古屋場所，11月福岡場所に来場した観戦者を対象に，質問紙調査を計４回実施した。質問紙の内容は四段階評価を用いて，大相撲の女人禁制と伝統に関する意識について尋ねたものである。質問紙の配布は，入り口ゲート付近で，９時の開場より14時までは来場した観戦者の男女それぞれ約10名に１名の割合で，14時以降は男女それぞれ約20名に１名の割合で配布した。また，質問紙の回収は全取組終了後に出口付近で行ったものと，配布時に添えた返信用の封筒による郵送での回収を行った。調査の期日，場所，配布数，回収数，回収率は表２の通りである。

表１　先行研究の調査項目

1. 性別・年令にみた調査人員	11. 本場所をみた回数
2. 調査にあらわれた観客の職業	12. 好きなスポーツ
3. 観客の学歴	13. ジャーナリズムへの関心
4. 観客の地域	14. 相撲の経験について
5. 国技館までの距離	15. 大相撲の魅力について
6. 来館の時刻	16. 本場所とラジオ・テレビの感じのちがいについて
7. 招待・自費の別	17. 夏場所の場内の感じ
8. 切符入手の仕方	18. 椅子席への改善
9. 性別・年令別にみた観客の席	19. 協会・力士・行司などへの希望（改善してほしい点）
10. 本場所をはじめてみた年令	20. 協会・力士・行司などへの希望（保持してほしい点）

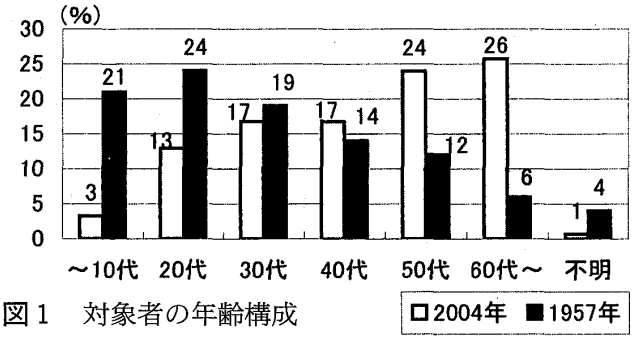

図１　対象者の年齢構成

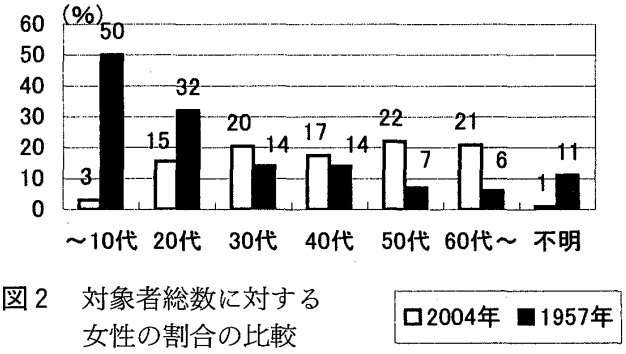

図２　対象者総数に対する女性の割合の比較

表2　調査の概要

	調査場所	調査日	配布総数	回収数	回収率
3月大阪場所	大阪府立体育館	3月20日（土）7日目	400	283	70.8%
5月東京場所	両国国技館	5月15日（土）7日目	400	282	70.5%
7月名古屋場所	愛知県体育館	7月14日（水）11日目	300	200	66.7%
11月福岡場所	福岡国際センター	11月23日（火）10日目	300	165	55.0%
		合計	1400	930	66.4%

表3　質問紙調査実施者（N=930）

	度数（人）		度数（人）	度数（人）
性別		場所別		
男性	516	3月大阪場所	283	
女性	414	5月東京場所	282	
		7月名古屋場所	200	
年齢層		11月福岡場所	165	
10歳未満	30			
20代	120			
30代	156	場所（性別）	男性	女性
40代	156	3月大阪場所	162	121
50代	223	5月東京場所	158	124
60代	175	7月名古屋場所	100	100
70代	57	11月福岡場所	96	69
80歳以上	7			

調査分析方法は，データの単純集計を行った後，年代別に分けてクロス集計を行い，女人禁制に関する13項目と，大相撲の伝統に関する10項目について回答内容の比較・検討を行った。また本調査での年代の分け方は，10代未満，20代，30代，40代，50代，60代と70代以上とした。

Ⅳ　調査結果

調査より得られた資料について，1）回答者の概要，2）女人禁制，3）大相撲の伝統の3点から整理・集計を行った。その後，年代別に分けて集計をした。さらに，観戦者の意識の傾向を把握するために，四段階評価を二段階評価にまとめて集計をした。

1．回答者の概要

回答者の概要は表3の通りである。また，回答者の年齢構成と対象者総数に対する女性の割合について，先行研究との比較をし，図1，2に示した。回答者の年齢構成は，2004年は50代・60代以上の中高年層が多く，1957年は10代・20代と若い世代が多かった。対象者総数に対する女性の割合は，1957年の10代が50%と多かったのに対し，2004年は50代の22%が一番多いという結果であった。

2．女人禁制

女人禁制に関する13項目について，男女別に分けて集計を行った。

1）女人禁制を守るべきか

女人禁制を守るべきかということについて，70代以上の人の80.4%，全体では65.4%が守るべきであると考えている（図3）。

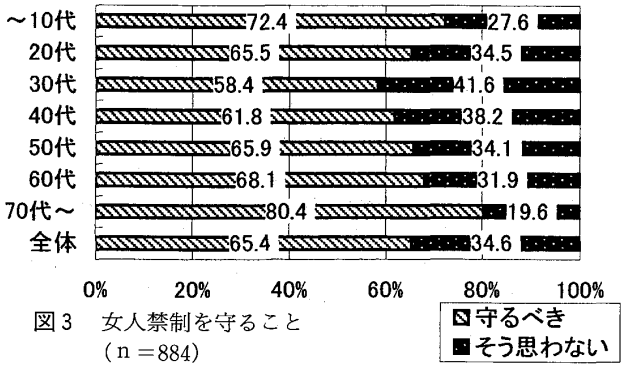

図3　女人禁制を守ること
（n＝884）

2）セレモニーで女性が土俵に上がること

セレモニーで女性が土俵に上がっても良いのではないかということについて，70代以上の人の69.5%，全体では58.9%が反対であると考えている（図4）。

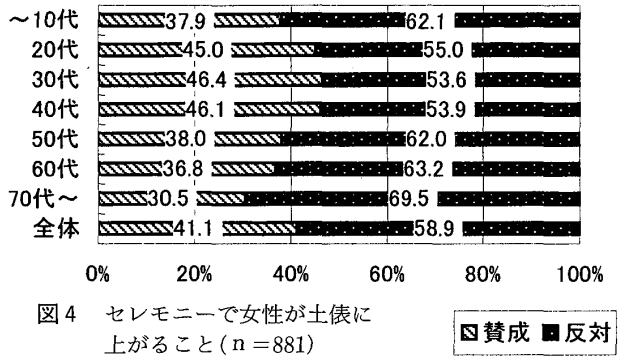

図4　セレモニーで女性が土俵に上がること（n＝881）

3）表彰時にだけ女性が土俵に上がること

表彰時だけなら土俵に上がっても良いのではないかという項目について，70代以上の人の56.6%が土俵に上がることには反対している。しかし，10代の人の55.2%は土俵に上がることに賛成している。全体でみると52.7%が反対であるとしている（図5）。

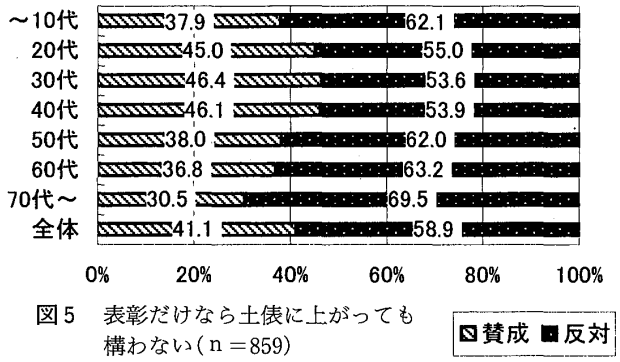

図5　表彰だけなら土俵に上がっても構わない（n＝859）

4）女性力士が土俵に上がること

女性力士が土俵に上がることについて，70代以上の人の83.3%，全体では74%の人が反対であると考えている（この項目は大阪・東京・名古屋のみの調査結果）（図6）。

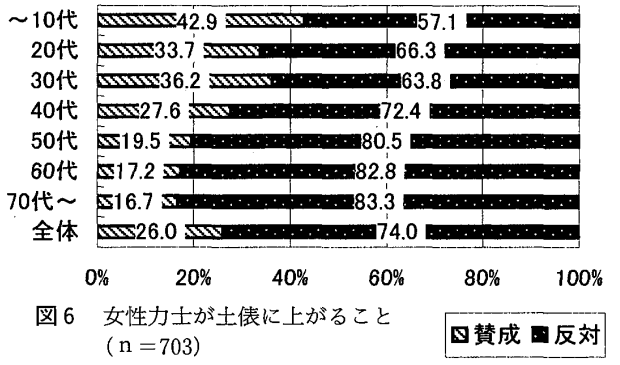

図6　女性力士が土俵に上がること（n＝703）

5）わんぱく相撲の女の子が土俵に上がること

わんぱく相撲の女の子が土俵に上がることについて，70代以上の人の67.4%が反対している。しかし，10代の66.7%は賛成している。全体では，51.2%が反対であると考えている（この項目は大阪・東京・名古屋のみの調査結果）（図7）。

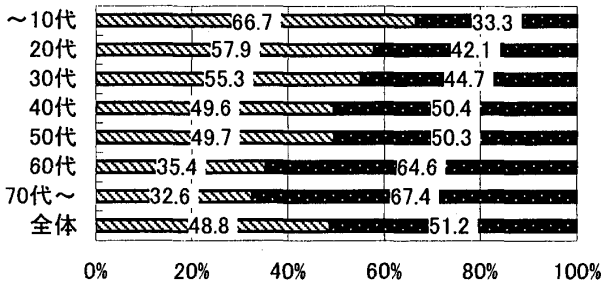

図7　わんぱく相撲の女の子が土俵に上がること（n＝684）

6）女性が土俵に上がれば女性ファンが増えるのではないか

女性を土俵に上げれば女性ファンが増えるのではないかということについて，20代の80.5%，全体では73.1%が増えるとは思わないと考えている（図8）。

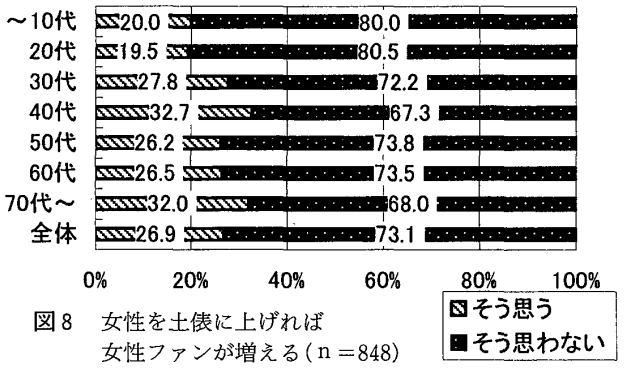

図8　女性を土俵に上げれば女性ファンが増える（n＝848）

7）男女平等の時代にナンセンスではないか

男女平等の時代にナンセンスなのではという項目については，20代の73.1%，全体では68.4%がナンセンスとは思わないとしている（図9）。

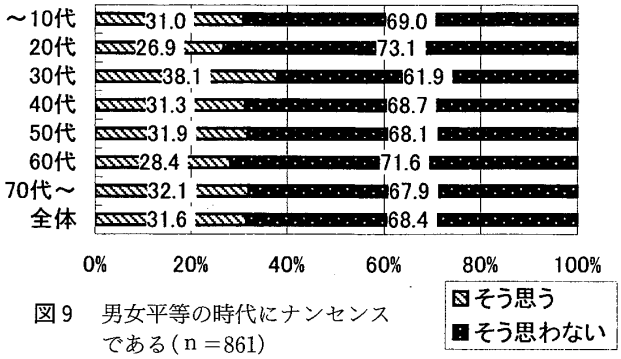

図9　男女平等の時代にナンセンスである（n＝861）

8）何でも男女平等はおかしいのではないか

何でも男女平等はおかしいという項目について，20代の67.5%，全体では64.8%がおかしいと思うとしている（図10）。

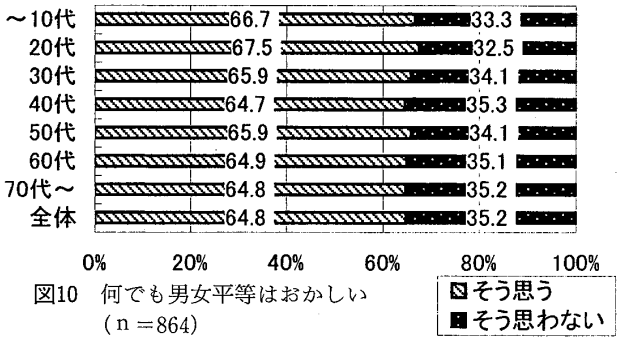

図10　何でも男女平等はおかしい（n＝864）

9）女人禁制は相撲関係者に任せるべきか

女人禁制については相撲関係者の判断に任せるべきかという項目について，70代以上の72.5%，全体では55.8%が任せるべきだとしている（図11）。

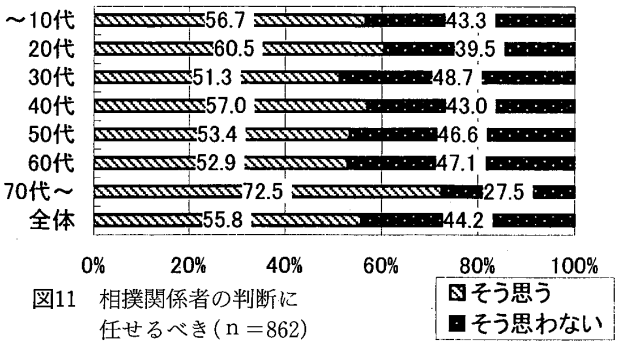

図11　相撲関係者の判断に任せるべき（n＝862）

10）女人禁制のような伝統を重んじる社会があってもよいのでは

女人禁制のような伝統を重んじるような社会があっても良いのではという項目について，10代の90%，全体では，77.3%がこのような社会があってもよいとしている（図12）。

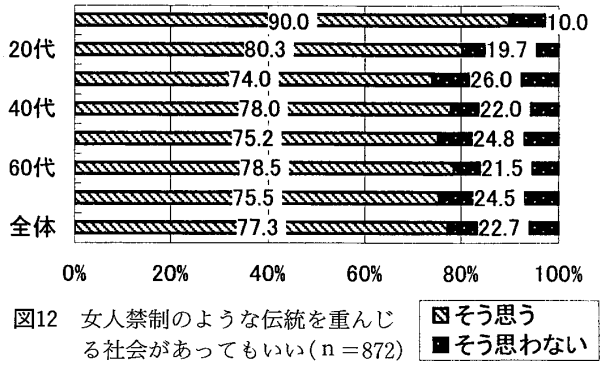

図12　女人禁制のような伝統を重んじる社会があってもいい（n＝872）

11）外国人に門戸を開いて女性に開かないのはおかしいのでは

外国人に門戸を開いて女性に開かないのはおかしいのではという項目について，30代の71.4%がおかしいと思わないとしている。しかし，10代の66.7%は外国人に門戸を開いて女性に開かないのはおかしいと考えている。全体では，54.2%がおかしいとは思わないとしている（この項目は福岡のみ調査）（図13）。

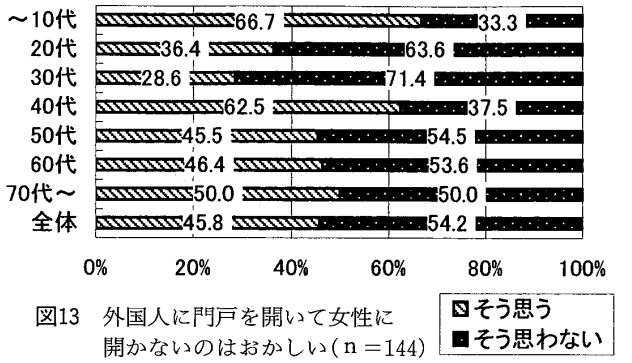

図13　外国人に門戸を開いて女性に開かないのはおかしい（n＝144）

12）男性社会に女性が出るべきではないのでは

男性社会に女性が出るべきではないという項目について，20代の86.4%が女性が男性社会に出てもよいとしている。しかし，70代以上の人の60%が女性は男性社会に出るべきではないとしている。全体では，64.7%が男性社会に出てもよいと考えている（この項目は福岡のみ調査）（図14）。

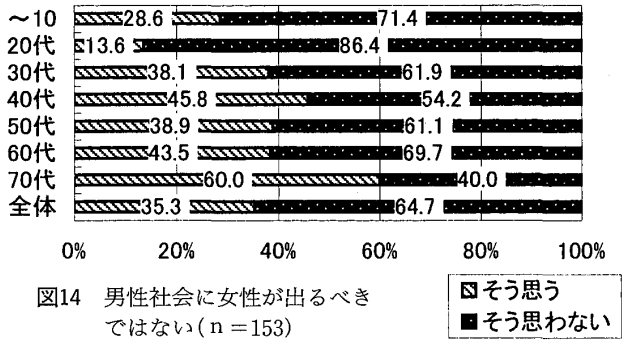

図14　男性社会に女性が出るべきではない（n＝153）

13）女性が天皇になること

女性が天皇になることという項目については70代以上の人の100%，全体では82.5%が賛成であると考えている（この項目は福岡のみ調査）（図15）。

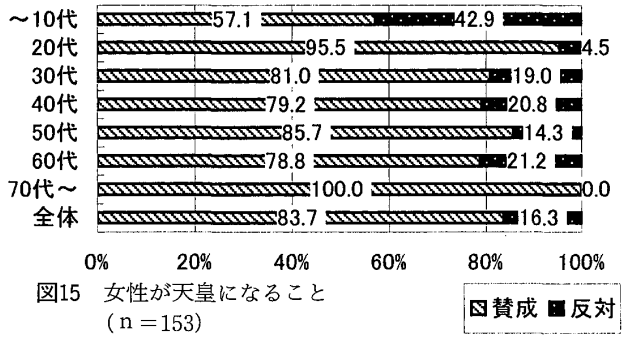

図15　女性が天皇になること（n＝153）

（現時点では，天皇の皇位継承は男系男子であり，女人禁制と関係があると考えられることから，この項目を質問項目に取り入れた。また今後，相関関係を明らかにしたい。）

（各項目の世代別傾向については，図３～15を参照。）

３．大相撲の伝統

大相撲の伝統に関する10項目について，男女別に分けて集計を行った。

１）同部屋対戦もするべきか

同部屋の対戦もするべきかという項目について，20代の63.8%，全体では57%が対戦するべきだと考えている（この項目は東京・名古屋・福岡のみ調査）（図16）。

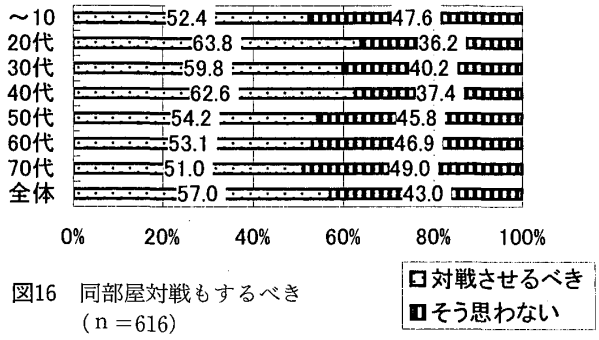

図16　同部屋対戦もするべき（n＝616）

２）仕切りの時間が長いのではないか

仕切りの時間が長いかどうかという項目について，40代の80.6%，全体では76%が長いとは思わないとしている（この項目は東京・名古屋・福岡のみ調査）（図17）。

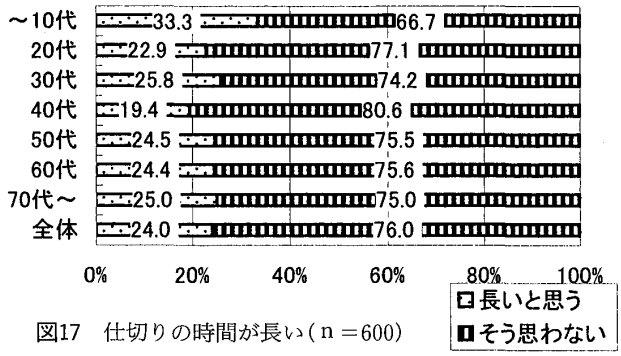

図17　仕切りの時間が長い（n＝600）

３）チケットの値段が高いのでは

チケットの値段について聞いた項目については，30代の90.6%，全体では80.9%がチケットの値段が高いと感じている（この項目は東京・名古屋・福岡のみ調査）（図18）。

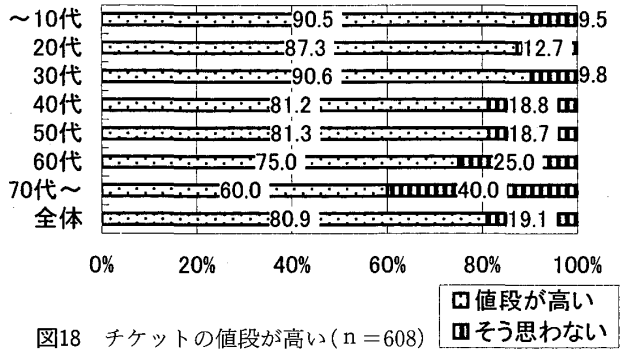

図18　チケットの値段が高い（n＝608）

４）結びの一番（終了時間）が早い

結びの一番が早いかどうかという項目については，10代の90.5%，全体では79.6%が早いとは思わないとしている（この項目は東京・名古屋・福岡のみ調査）（図19）。

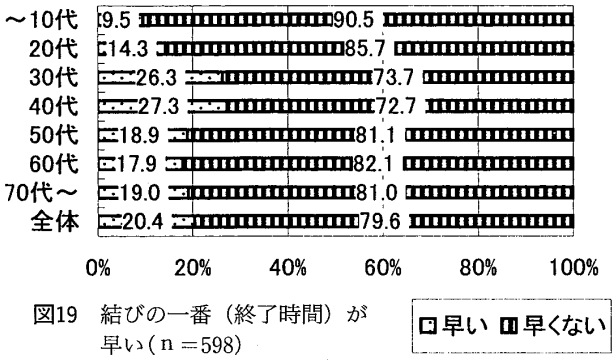

図19　結びの一番（終了時間）が早い（n＝598）

5）公傷制度はあった方が良い

公傷制度があった方が良いかという項目については，70代以上の人の73.9％があった方がよいとしている。しかし，10代の70％は公傷制度がなくても良いと考えている。全体では，57.5％が公傷制度はあった方が良いと思うとしている（この項目は東京・名古屋・福岡のみ調査）（図20）。

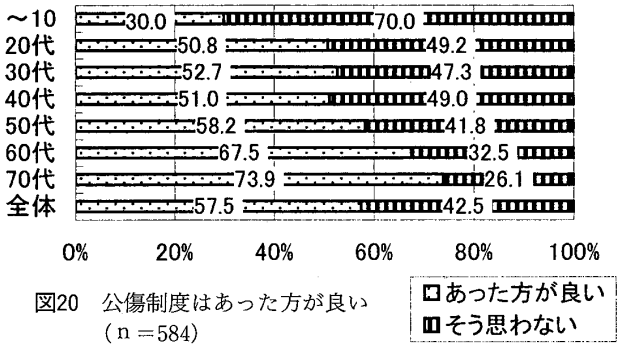

図20　公傷制度はあった方が良い（n＝584）

6）手刀は左右どちらでも良い

手刀は左右どちらでも良いかという項目について，30代の76.6％，全体では63％が左右どちらでもよいと考えている（この項目は名古屋・福岡のみ調査）（図21）。

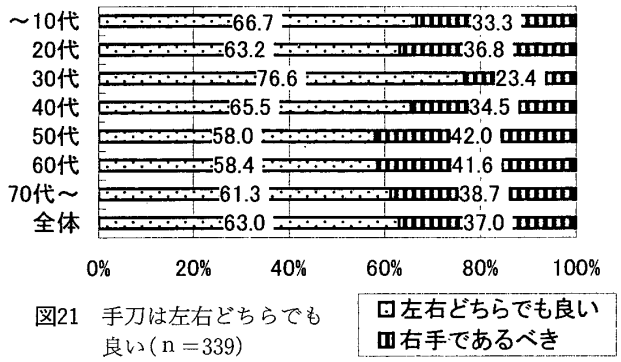

図21　手刀は左右どちらでも良い（n＝339）

7）外国人力士が増えること

外国人力士が増えることについての項目について，20代の67.2％が増えることに賛成であるとしている。しかし，70代以上の人の66.1％が反対であると考えている。全体では，52.7％が賛成であるとしている（図22）。

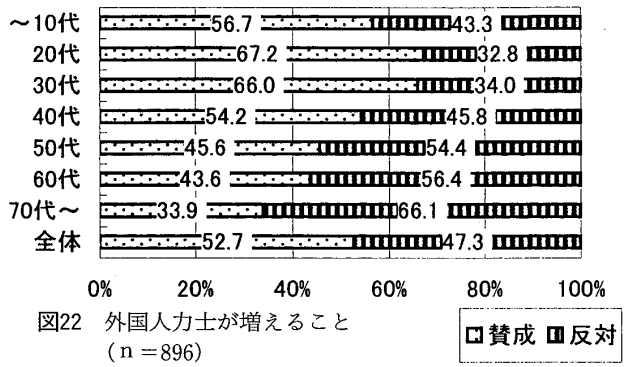

図22　外国人力士が増えること（n＝896）

8）学生力士が増えること

学生力士が増えることについての項目は，30代の91.5％，全体では86.5％が学生力士が増えることに賛成だとしている（図23）。

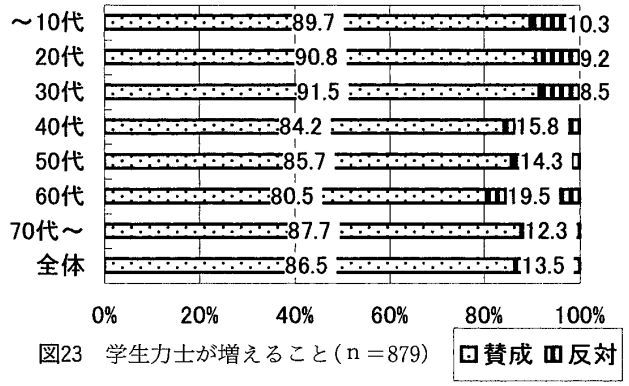

図23　学生力士が増えること（n＝879）

9）大相撲はスポーツである

大相撲はスポーツであるかどうかという項目は，50代の98.5％，全体では93.7％が大相撲はスポーツであると考えている（この項目は東京のみ調査）（図24）。

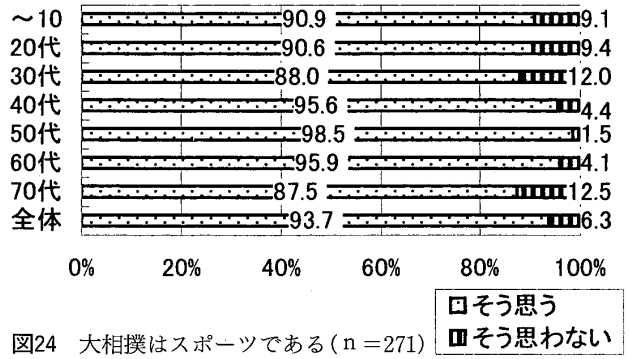

図24　大相撲はスポーツである（n＝271）

10）大相撲は日本文化である

大相撲は日本文化であるかどうかという項目は，10代と70代以上の人の100％，全体では98.2％が

日本の文化であると考えている（この項目は東京のみ調査）（図25）。

（各項目の世代別傾向についは，図16～25を参照。）

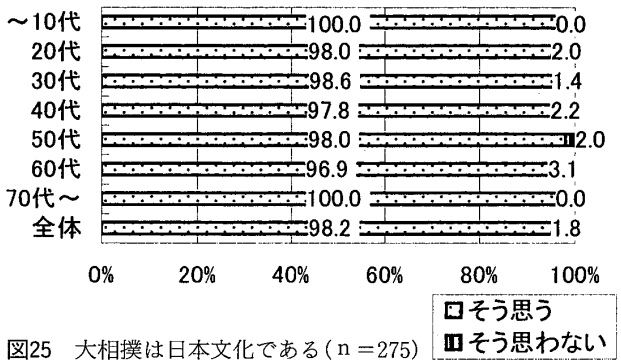

図25　大相撲は日本文化である（n＝275）

V　まとめ

大相撲における女人禁制と伝統に関する観戦者の意識について年代別の傾向の手がかりを得るために，質問紙調査を行った。その結果，次のことが明らかとなった。

1．大相撲観戦者の年齢層

回答者の年齢層の傾向としては，現在は50代以上が多いことが明らかとなった（図１参照）。昭和32年（1957）頃には観戦者数の半数以上を占めていた10～30代の観戦者が約50年を経過した今，50～70代になり，観戦を継続していることが現在の観戦者の年齢構成に関係しているように考えられる。これを基にして推察すると，2004年時点で10代，20代の観戦者が少ないということは，今後，観戦者数は益々減少していく可能性があるとも考えられるだろう。また，現時点で10代・20代の若い世代の観戦者数がなかなか増加しない理由としては，大相撲が実際に行われている時間が９時から18時と終了時間が早いことや，大相撲は取り組みを淡々と繰り返していくために他のスポーツ種目よりもイベント性が低い印象があること，大相撲以外の格闘技，例えば総合格闘技，Ｋ１等や野球，サッカー等の他のスポーツ種目に興味関心が高いこと，大相撲の伝統や格式など，敷居が高いという印象を与えているからではないだろうか。

2．女人禁制と伝統

江戸中期から女性が大相撲の土俵に上がれないという女人禁制は続いているが，それ以前から女性力士による女相撲は行われていたとされている。大相撲は競技相撲であり，祭儀や神事相撲とは異なったものだとされているが，女人禁制に関してはいつまでも祭儀や神事相撲と同じように扱われている。また，大相撲の他にも日本国内には女人禁制とされていることがいくつかある。例えば，大峯山などの山岳，祇園祭などの祭事や酒造り等数多く存在している。しかし，明治時代になり女人禁制は封建的で遅れた慣習とみなし，撤廃指令が出され，各地で解除されてきた。現在の女人禁制は，妊娠，出産，月経などの特定の時間立ち入りを禁じて，その後は解かれる「一時的な禁制」と，女性そのものを排除して，ある空間に恒常的に立ち入りを禁止する「永続的な禁制」がある[7]。現時点の大相撲での女人禁制は「永続的な禁制」に当てはまるだろう。

本調査結果を比較検討した結果，大相撲観戦者の女人禁制と伝統に関する意識には大きな差はみられなかった（図３～25参照）。しかし，表彰時やわんぱく相撲の女の子力士が土俵へ上がることに10代は賛成の傾向が強く，70代以上は反対の傾向が強いという意見の相違がみられた（図５，７参照）。そして，外国人に門戸を開いて女性に開かないのはおかしいと10代は考えている傾向があるのに対し，30代はおかしくないという傾向がみられた（図13参照）。外国人力士が増えることについて20代は賛成の傾向なのに対し，70代以上は反対の傾向がみられた（図22参照）。また，男性社会に女性は出るべきでないという傾向の強い70代以上，出ても良いという20代の傾向にも相違がみられた（図14参照）。しかしながら，大相撲観戦者の全体としての意見は，女人禁制は今後も守っていくべきであり，この様な伝統を重んじる社会があっても良いという傾向が明らかになった。だが，一般大衆の意見は女人禁制に反対である[8]としており，両方の意見が混在しているのが現状でもある。今後は国技館の土俵には上がれないが，大阪，名古屋，福岡での本場所の際には表彰やセレモニーで土俵に女性が上がれるようにするなど，

女人禁制を一部解除していくことの検討も必要であるだろう。

この調査により，大相撲観戦者の意識の傾向が明らかとなった。これらを基に相撲協会との連携を図ること，また大相撲の伝統の中で本当に守らなければならないこととは何かを今後検討していくことが，必要であると考える。

引用文献

1）濱島朗・竹内郁郎・石川晃弘（1978）社会学小事典，有斐閣，p. 285

2）生沼芳弘・了海諭・山本恵弥里他（2004）大相撲における女人禁制の研究（Ⅰ）―大相撲観戦者の男女比―，東海大学紀要体育学部第34号，pp. 25～33

3）了海諭・生沼芳弘・山本恵弥里（2005）大相撲における女人禁制の研究（II）―大相撲観戦者の基礎データ―，東海大学紀要体育学部第35号，pp. 59～63

4）山本恵弥里・生沼芳弘・了海諭（2005）大相撲における女人禁制の研究（III）―大相撲観戦者の事例から―，東海大学紀要体育学部第35号，pp. 65～72

5）生沼芳弘・了海諭・山本恵弥里（2005）大相撲における女人禁制の研究（IV）―外人観客の意識調査―，東海大学紀要体育学部第35号，pp. 73～81

6）和歌森太郎（1957）大相撲観客数調査結果報告―夏場所観客数の生態と表情をさぐる―，「相撲」昭和32年8月号，ベースボールマガジン社，pp. 203～222

7）赤坂憲雄・鈴木正崇ほか（2003）女の領域・男の領域，岩波書店:東京 pp. 57～84

8）朝日新聞 be on Saturday「be between―女性と土俵―」，2004/3/6

参考文献

9）朝日新聞朝刊，2002/2/24，p. 14

10）生沼芳弘（1994）相撲社会の研究，不昧堂出版

11）鈴木正崇（2002）女人禁制，吉川弘文館

12）山田知子（1996）相撲の民俗学，東京書籍，pp. 147-183